令和4年11月号No.175

プチジャン神父と出津の野中騒動

本会理事　野田和弘

1、プチジャン神父の出津訪問

慶応元年(1865)2月の信徒発見後、プチジャン神父は潜伏キリシタン(以下、「キリシタン」と記述)が浦上ばかりではなく、長崎の港外周辺や外海地区、さらには五島まで、多数存在していることを知り、ぜひ訪れたいと願っていた。そしてついに慶応元年(1865)9月13日の夜半、神父は神ノ島の帳方ミゲル忠吉の船で、大浦海岸を秘かに漕ぎだし、出津の小浜海岸に上陸した。

当時の出津は、戸数260戸ほどで、医師の松本敬三郎を除く全員がキリシタンであった。神父は迫頭(現在の出津教会の近く)のバスチャン重蔵の家に案内され、そこで多くのキリシタンと会った。彼らは皆感激して泣きだしたという。結局、神父は出津に2泊して帰った。

2、出津の野中騒動－急進派と慎重派の対立

その後、出津のキリシタンの内約20名は、秘かに大浦天主堂を訪ね、神父らから教理を学んで帰り、出津のキリシタンに伝えるなど、積極的な活動を始めた。

このような急進的な動きに対し、同じキリシタンの庄屋は、キリシタンであることが発覚すれば大変な事になると心配し、急進派のキリシタンにこれまでどおり慎重に行動するよう説得したが、彼らは聞き入れなかった。

そこで庄屋は慎重派のキリシタンと相談し、急進派の意気をそぐために、彼らが大切にしていた「十五玄義図」と「聖ミカエル」の2枚の聖画を盗み出し隠してしまった。

中山文孝模写「十五玄義図」　(長崎歴史文化博物館収蔵)

結果、急進派はいきり立ち、ついに出津の野中という所で、両派のキリシタンが集まり、返せ返さぬとの口論の末、ついには刃物や薪での乱闘事件に発展した。これが出津の野中騒動といわれる事件である。その後、慎重派が聖画を返したので騒ぎは収まったが、この事件は出津のキリシタンの間に、深いしこりと対立を残した。

3、野中騒動がもたらしたもの

この事件を契機として、出津のキリシタンは、約60戸の慎重派と約200戸の急進派に分裂した。

そして浦上四番崩れを契機に、これまで取り締まりが緩かった佐賀藩も厳しい詮索を行い、キリシタンと疑われた人達に、苦役労働や拷問などこれまでにない迫害を行った。急進派が多く対象となったことも、両派の対立が激化する一因ともなった。

明治6年(1873)キリスト教信仰が事実上許された時、出津の急進派はカトリック教会に次々と所属した。しかし、慎重派はカトリック教会に所属せず、これまでどおりの信仰形態を守り続けた。このような人達は、かくれキリシタンと呼ばれた。出津地区にかくれキリシタンが存在した原因の一つに、野中騒動があったといえるだろう。

4、十五玄義図

野中騒動の原因となったこの聖画は、宣教師の指導のもと日本のキリシタンが制作したものと考えられている。上下4段に分かれ、下から2段目は喜びの玄義、中央は苦しみの玄義、上段が光栄の玄義となっている。キリシタンはこの玄義の中にキリストの生涯を描き出し、祈りの対象としたのである。なお玄義とは、神の啓示によってのみ知る事柄という意味である。

この2枚の聖画は、明治以降も出津教会に掲げられていた。その後、貴重な遺物として浦上天主堂の展示室に納められていたが、太平洋戦争末期、本原地区の信徒の家に疎開していた。しかし、原爆投下によるものと思われるが、空襲により焼失した。幸い焼失前に長崎の画家中山文孝が模写した図が残されているので、その図様を知ることができる。

本稿は令和4年9月例会の発表『出津野中騒動と菖蒲田墓地について』の要旨である。

参考文献:『外海町誌』(旧外海町)(P412～420)
『出津教会誌』(出津カトリック教会)(P46～51)